

病院待合室 広がる可能性

東京で関係者らシンポ



シンポジウム「待合室から医療を変えよう！」
(3月24日、東京都文京区の東京大)

病院や診療所に計約30万力所もある待合室をもっと活用できないか。シンポジウム「待合室から医療を変えよう！」が3月下旬、東京都文京区の東京大で開かれた。主催は東京大公共政策大学院の自主的勉強会「待合室プロジェクト」(河内文雄代表)。全国から医療関係者や市民ら約300人が参加した。1日に数万人が利用する待合室の可能性を見直すきっかけになる議論だった。



予約患者数を伝えるボードが置かれた大病院の入り口。待合室には多数の患者があふれていた

予約患者数を伝えるボードが置かれた大病院の入り口。待合室には多数の患者があふれていた

「待合室の本棚をインテリアでなく、患者さんに役立つものに

ち、中に入ってから 集客施設」といえる。空席を探す「順番待ち」、やっと座れたらゆで上がりまでの「仕事待ち」と「待ち」の3要素を挙げた。この「待ち」の効率化は難しい。病院は予約なし」だと、開院前に患者の6割が来院し

「患者の権利オンパズマン東京」の大山正夫さんは「看護師が時折見回り、具合の悪そうな患者に声をかけてくれるとよい。待合室のワゴンに変えたらどうか」と提言した。

待合室の実態調査の発表もあり、今後も研究会を続けるという。「待合室を医療と社会を変える資源として再利用しよう」(河内代表)という姿勢は共感を得ていた。

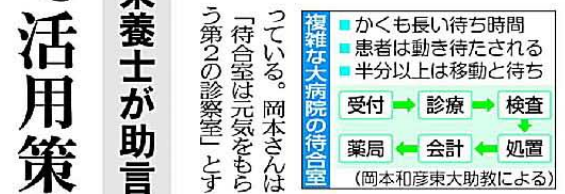
東大病院の設計に携わった岡本和彦東大工学部助教が「待合室は誰のもの？」と問う基調講演をした。大病院では診察などの台間に患者はひたすら待ち、探している。

岡本さんは「なぜ待つかは病院もラメン屋も同じ」と例えた。開店前に並ぶ「出発待

時間短縮で「待ち」時間は減り、電子化を導入すればさらにスムーズになる。

コンビニ200店

待合室の設計では効率より、大きな窓で採光するなどアメニティが重視。1日に数千人の患者や家族が来る大病院もあり「有数の



時間複数回、栄養指導を重ねたところ、9カ月で血糖値は下がった。待合室は管理栄養士の活動の場になる」と報告した。

見回りを要望

千葉県立東金病院(東金市)は「待合室の栄養士」を始めた。待合室や空いている診察室を使い、待ち時間に糖尿病患者一人一人に5〜10分栄養指導を繰り返している。

同病院の管理栄養士の前田恵理さんは「短

